

■ 論 文

インクルーシブ保育におけるプロジェクト活動の展開方法 ——異年齢クラスでの実践の分析を通して——

山本 理絵^{*1}
國京 恵子^{*2}

How to Develop Project Activities in Inclusive Early Childhood Care and Education:
Through an Analysis of Practices in the Mixed Age Group

Rie YAMAMOTO
Keiko KUNIKYO

キーワード：インクルーシブ保育，プロジェクト活動，ドキュメンテーション，異年齢保育
inclusive early childhood care and education, project activity, documentation, mixed age group

I 研究の目的・方法

1. 研究の背景と目的

本研究代表者は、年齢の幅が広く差異や多様性を受け入れやすい特徴をもっている「異年齢保育」に着目し、異年齢保育では発達障害（疑いを含む）やその周辺にいる、人間関係に困難を抱える幼児等を含んだインクルーシブ保育をつくりやすいことを指摘してきた¹⁾。ここでインクルーシブ保育とは、「多様性を前提として、違いを尊重し生かすことで、排除なく共に育ち合う環境を創造していく保育のあり方²⁾」を言う。そして筆者は、異年齢保育を通してどのような援助方法が有効か、保育実践の継続的観察及び保育者等からの聞き取り調査の分析により明らかにしてきた³⁾。

この研究の過程で、子どもたちの興味・関心に即したテーマにそって展開されるプロジェクト的活動の中で、「特別の配慮が必要」だと思われた子どもたちが、生き

生きと力を発揮していく姿が見られた⁴⁾。しかし、異年齢編成にただけでは、インクルーシブ保育になるわけではない。筆者はインクルーシブ保育になるために、以下の点の重要性を提起した⁵⁾。①子どもの興味・関心に応じた多様な活動、②友達の活動を見えやすく模倣しやすくする工夫、ルールをわかりやすくし遊びをイメージしやすいようにする視覚的な工夫、ドキュメンテーションの作成・活用、③集団そのものがもつ支援力・教育力に依拠し、子どもの論理を尊重し、子ども同士の相互作用を信頼すること。

この研究成果に基づき、さらに、プロジェクト活動の効果と展開方法を明らかにしようと考えた。プロジェクト活動については、日本でも歴史的には行われてきたが、イタリアのレッジョ・エミリア・アプローチによるドキュメンテーション及びプロジェクト活動が、現在、スウェーデンをはじめ世界の幼児教育の中で取り入れられるようになってきている。しかし、まだ外国の実践の紹介と日本における実践が試みられ始めたばかりで、具体的な実践方法の理論的な整理・構築はなされていない。

^{*1} 愛知県立大学教育福祉学部
^{*2} 名古屋女子大学専任講師

保育現場では、どのようにプロジェクト活動のきっかけをつくっていったらよいのか、また、どのように継続させ発展させていったらよいのか、戸惑いも大きい。なお、ここでは「プロジェクト活動」の条件は、以下のように捉えている⁶⁾。①子どもの興味・関心に応じたテーマである。②保育者はおおまかな計画は持っているが、子どもたちの発想や話し合いによって展開される。③活動の途中でも疑問や問題が生じてきて、それを探究したり解決したりしようとする。④個々の子どもの関心事やアイデア、活動の経過と結果などは、話し合いやドキュメンテーションによって共有されていく。⑤保育者も一緒に楽しんで探究していくなかで、園外の地域の人々などとのつながりや社会参加につながるように活動が発展していく。

本論文では、このプロジェクトアプローチがインクルーシブ保育においても有効であると考え、特別な配慮が必要な子どもを含むクラス集団におけるプロジェクト活動の効果と保育者の指導・援助方法のポイントを明らかにすることを研究目的とする。

2. 研究方法

(1) 観察方法

A 保育園の幼児異年齢クラスにおいて、月1回程度の参与観察及び保育者とのカンファレンスを継続的に行った。A 保育園は、3～5歳児は異年齢クラスであり、各クラスでプロジェクト活動に取り組んでいる。2月に作品展があり、プロジェクト活動の成果を展示し、それを使って遊ぶ行事が予定されていた。

観察は、午前9時すぎ頃から11時半頃まで、通常の保育の流れの中で参与観察を山本・國京の2名で行った。カンファレンスは観察の後2時間程度行い、クラス担任及び主任と一緒に、プロジェクト活動の様子、注目している子どもについての1か月間の状況・変化や気になっていること、観察でみられたことなどを報告し、その意味や今後の方針などについて話し合った。カンファレンス終了後に筆者らで記録を作成し内容を確認した。

(2) 分析対象資料と分析の視点

分析対象とした実践は、2018年4月～2019年3月に観

察・調査した、R組（3歳児8人、4歳児8人、5歳児8人、計24人）の実践である。園でプロジェクト活動を取り入れて3年目の実践になる。上記の観察及びカンファレンスの記録の他、保育園で作成しているプロジェクト活動の記録及び個人記録も分析の資料とし、プロジェクト活動の発展と子どもたちの参加状況、保育者の働きかけ、環境設定の工夫について分析する。具体的には、以下の視点から分析する。

①多様な個性・特性をもった子どもたちがプロジェクト活動において、どのように変化・発達していくか（興味・関心・疑問・認知面の発達、活動意欲や見通し・主体性、集団の人間関係）

②展開方法：プロジェクト活動において、どのような援助方法が有効か—活動発生の契機、子どもたちの話し合い、イメージの共有、ドキュメンテーションの活用、個からグループ・クラス集団への広がり、保育者以外の専門家や保護者・地域社会の人々との連携、年齢による違い等の視点からそのポイントを明らかにする。

(3) 倫理的配慮

本研究の実施・発表にあたっては、対象の保育園及び保護者には承諾を得、愛知県立大学研究倫理審査委員会の許可を得ている。

II. プロジェクト活動の実践結果と分析

1. プロジェクト活動の導入方法

プロジェクト活動の発生は、①状況の中から偶然生まれる、②保育者の提案から生じる、③子どもたちの自発的アイデアから発生することがあるが⁷⁾、本プロジェクトは、子どもたちの日常の遊びから連想されるテーマ（お祭り）を保育者が話題になるように話し合いを仕掛けており、②と③の両方の要素が含まれている。

観察したクラスは、遊戯室のボルダリングやボールプールなど、身体を使って遊ぶことが好きな子どもが多いクラスであった。4月中旬、自由遊びの時間に異年齢でボーリングをして遊ぶ子どもが多かった。そのなかで、机の上や棚の上にピンを置き、ボールを転がすのではな

く、投げてピンに当てて遊んでいた。その様子を見て5月上旬に、保育者が射的コーナーを用意した。すると子どもたちは鉄砲に大喜びし、ルールを決めて交替で射的を楽しんでいた。的の点数に関心をもって、遊ぶようになっていった。

5月8日に、保育者は今遊んでいる遊びの話から、的あてがどこでできるか問い、お祭りを連想させ話し合っていると、お祭りに行った経験がある子どもが多く、5歳児が輪投げを作りたいと発言する。みんなでお祭りを作ること、どんなお祭りがあるか調べてみることを保育者が提案すると、子どもたちがパソコンで調べると言い、地域の夏祭りのスケジュールを調べて書き出していった。

このように、子どもたちのブームになっている遊びを発展させ、そこからプロジェクト活動へつなげる方法もある。

2. プロジェクトの発展と子どもたちの興味・関心・疑問及び認識の高まり

(1) 子どもたちの興味・関心・疑問・認識の高まり

プロジェクト活動の流れは、夏祭りのスケジュールを調べる、図書館で祭りの本を借りてくる(5月)→神輿作り(5~6月)→神輿の鳳凰作り(7~9月)→焼き鳥パーティー、屋台づくり(チョコバナナ・サメ釣り・金魚すくい)(9~10月)→浴衣・提灯・うちわづくり(10~11月)→櫓づくり(1月)→櫓の設置、祭りごっこ(2月)というように発展していった(表1参照)。その過程で、子どもたちの興味・関心・疑問や、認識(知識・思考、表現、価値観等)がどのように発展していったのか、確認したい。

子どもたちの興味・関心は、的当てゲームから、夏祭りをいつ、どこで、どのようにやっているか、そして、お神輿を担ぎたいから作りたい、屋台で売っているチョコバナナを作りたい、サメ釣りや金魚すくいをやりたいから作りたい、という要求でプロジェクトが進んでいった。

祭りに関係あるものを作る活動が多かったため、その作り方に関する疑問がたくさん湧いてきた。神輿の屋根はどうやって作ったらよいか、屋根の端の丸みや神輿の飾り、鳳凰はどうやって作ったらよいか、神輿の飾りの

色や鳳凰の金色はどうやって塗ったらよいか、神輿の担ぎ棒はどうやって作ったらよいか、バナナの色は黄色か白色か、サメの色はどんな色か、金魚すくいのポイはどの紙だと破れやすいか(いろいろな紙で試してみる)、金魚すくいのたらい(ケース)に室内で水を入れるにはどうしたらよいか、浴衣はどうやってできているか、提灯はどうやってできていてどのように作ればよいか、浴衣の布の切り端がほつれないようにするにはどうしたよいか、櫓の柱はどうやって作るか、金魚はどうやって飼えばよいか、常にいろいろなことを疑問に感じ、調べたり試したりしながら、作っていった。

そして、制作するにあたって疑問に思ったことやわからないことを調べていた。保育者が何で調べるか子どもたちに聞くと、これまでの経験から「パソコン」と答え、祭りのスケジュールや神輿や鳳凰の形を調べた。パソコンでわからない時は、図書館に行って本を借りてきていた。また、実際にお祭りに行ってみてくることも、重要な考える材料となっていた。

もちろん、画像や本から調べるだけでなく、浴衣や提灯の実物を見たり分解したりして、どうなっているか調べて、考えていた。チョコバナナを作るときは、バナナは何色か聞くと、多くの子どもが固定観念をもって黄色と答えた。皮は黄色でも皮をむくと白いということ、実際のバナナを見て確認していた。

また、このプロジェクト活動では、数や長さを考える場面がたくさんあった。5歳児は鳳凰の足の指は何本か数えていた。焼き鳥パーティーの材料については、焼き鳥を1人2本ずつ食べたいので、クラス24人分だったら何本必要か(3歳児は「いっぱい」と言っていたが)数えていた。チョコバナナの数はお店に来る2歳児の数を(ロッカーの数を調べに行き)入れて14本必要だと数えていた。また、神輿の担ぎ棒や櫓の支柱は何本必要で、その長さを同じにするためにはどうすればよいか考えて、並べて同じ長さの所に鉛筆で印をつけて切っていた。浴衣の長さは、クラスで一番背の高い子どもに合わせて丈をメジャーで測ってメモしながら、型紙を作っていた。

また、形の違うものをどうやってくっつけたらよいかも試行錯誤していた。神輿の飾り(トイレットペーパーの芯を縦半分に分けて作ったもの)をどうやってくっつけるか考え、神輿の担ぎ棒は、土台の下の方に穴をあ

表1 プロジェクト活動の経過

	月日(曜日)	活 動	参加者等
	4月中旬	異年齢でボーリング遊びをすることが多い	Y児も参加
	5月上旬	異年齢でのあて遊びを楽しむ	Y児も参加
神輿 つくり	5月8日(火)	夏祭りの話からパソコンで調べ、スケジュールを書く	調べるのは5歳児
	5月11日(金)	調べたことの発表、さらに調べて祭りの日をシール帳カレンダーにシールを貼る	
	5月16日(水)	祭りについて図書館で調べたいことを話し合い、メモを残す	
	5月17日(水)	図書館に行って本を探し、園に帰ってみんなに報告する	図書館に行くのは5歳児
	5月18日(水)	神輿を描く(パソコンから画像を選ぶ)、神輿に使う段ボールを集める	5歳児中心
	5月23日(水)	神輿の絵を見てどんな神輿を作るか話し合う、焼きおにぎりづくりの話	
	5月25日(金)	焼きおにぎり作り(米とぎ、炊飯、にぎる、味付け、焼く、食べる)	
	5月25日(金)	祭りのスケジュールを書いた手紙をコピーして持って帰る	
	5月28日(月)	神輿作りが始まる(段ボール箱をくっつけて土台完成)	Y児も見ていて意見を言う
	6月1日(金)	神輿の屋根(三角に段ボールを載せる)を作る	5歳児中心
	6月4日(月)	土日に行った祭りの話、神輿の屋根の形を整えて土台と合体する	
	6月8日(金)	明日のお祭りの話、神輿の色塗り(黒絵具)	X児も色塗りに参加
	6月12日(火)	神輿の側面の色塗り、屋根の上や側面の飾り作り(トイレトペーパーの芯)	
	6月15日(金)	神輿の下側面につける飾り(トイレトペーパーの芯を切ったもの)に金色テープを貼る	
	6月19日(火)	神輿の屋根に付ける飾りと下側面に付ける飾りに色テープを貼る	Y児も参加
	6月22日(金)	神輿の飾り付け、絵の具が垂れた部分を塗り直す、やりたい屋台を考えてメモを掲示する	Y児も色塗りに参加
	6月25日(月)	かき氷を作って食べる	全員参加
	6月29日(金)	神輿の飾りをつける、鳳凰に関心を寄せる	Y児も参加
	7月3日(火)	鳳凰をパソコンで調べて描く人と神輿に飾りをつける人に分かれて活動する	
	7月9日(月)	鳳凰をまだ描いていない5歳児が描く	
	7月26日(木)	鳳凰の写真をみんなで見て、協力して牛乳パックで作りはじめ	X児も写真を見ようとする
	7月27日(金)	神輿の担ぎ棒作り、鳳凰の足作り	Y児も参加
	8月6日(水)	獅子の面を見て姉妹園に獅子を見に行くことを話す	Y児も興味をもって話す
	8月8日(火)	姉妹園で法被を着て獅子を持って練り歩く	
	8月9日(木)	獅子の絵を描く、神輿の棒に色を塗る	
	8月16日(木)	5歳児が描いた獅子の絵を見せる、鳳凰の羽作り、神輿の太鼓のマーク作り(4歳児が始める)	
	8月17日(金)	鳳凰の羽作りと太鼓のマーク作り(2つに分かれて)、鳳凰の色塗りについて話し合う	
	8月24日(金)	鳳凰のパーツを合体させる、神輿の棒を付ける	
	8月28日(火)	鳳凰の形が完成、園長に相談して鯉のぼり職人に手紙を書いて全員で投函する	
	8月29日(水)	神輿の担ぎ棒を固定する、焼き鳥パーティの話し合い	
8月30日(木)	金色の絵の具が届く		
9月5日(水)	鳳凰に金色を塗る、神輿の飾りの作り方を園長に教えてもらう	X児 Y児も興味深々	
9月7日(金)	鳳凰に金色を塗る、神輿の飾りを作る、焼き鳥パーティの日程を園長に話しに行く	Y児も参加	
9月11日(火)	焼き鳥パーティの計画を話し合う	全員	

屋台作り	9月12日(水)	こいのぼり職人にお礼の手紙を書く, 屋台の屋骨組み(洗濯干し)を探す	
	9月13日(木)	焼き鳥パーティ, 屋台の屋根の段ボールを切る	
	9月20日(木)	屋台作り, チョコバナナ作りに分かれて進める	Y児翌日の活動に意欲的
	9月21日(金)	3,4歳児がチョコバナナの屋根に色塗りをする(5歳児は老人ホームにお出かけ)	Y児色塗りに参加
	9月25日(月)	屋台の屋根の色塗り, チョコバナナ作り	
	9月28日(金)	チョコバナナの色塗り, 屋台の看板書き, サメ釣りの話	Y児も参加
	10月4日(木)	屋台の看板色塗り, チョコバナナ色塗りとサメ釣りの網の枚数を確認する	Y児色塗りに参加
	10月5日(金)	チョコバナナのトッピングとサメ釣りの網作り	
	10月12日(木)	バナナの棒をさす土台とサメ釣りの網を作る(結束バンドでつなげる)	
	10月15日(月)	バナナをさす台の色塗り, 金魚作り(3歳児), サメ釣りの網完成	
	10月16日(火)	チョコバナナを台にさして完成, 金魚作り(24日まで続く), サメ作り	X児金魚を作る
	10月19日(金)	金魚作りとサメ作りに分かれる	
	10月23日(火)	5歳児がサメを作り終わると4歳児が2人で一匹のサメを作る, 金魚すくいのポイを作る	Y児もサメを作る
	10月24日(水)	サメ作り, ポイ作り(水に破れやすい紙を見つける)	
浴衣 提灯 うちわ作り	10月26日(金)	話し合い, 祭りに必要な提灯・浴衣・花火・うちわを作ることを決める, 材料を探す	Y児提灯作りを考える
	10月29日(月)	浴衣作り(型紙を作る)とうちわ作り(紙を染める)	5歳児・3歳児中心
	10月30日(火)	うちわ作り(紙が貼っていないうちわを倉庫で発見し, 染め紙を貼る)	3歳児中心
	10月31日(水)	うちわ作り(完成)と浴衣作り(布を切る)	3歳児・5歳児中心
	11月1日(木)	提灯作り(風船に紙を貼って), 浴衣づくり	4歳児・5歳児中心
	11月5,6,13日(火)	提灯作り(色塗り), 見本を見て上下に穴をあける	4歳児中心 X児も参加
	1月7日(月)	浴衣作り, 提灯作り	
櫓作り他	1月8日(火)	浴衣作り(帯の素材を探す), 提灯完成	
	1月10日(木)	櫓について話し合い, 材料を探し作り始める	
	1月11日(金)	櫓の柱の棒を探し4本の柱を組み立て, 柱の位置をみんなで決める	
	1月15日(月)	柱に穴を開けて横に棒を通す	
	1月16日(水)	柱に穴を開ける場所に印をつける	
	1月17日(水)	3,4歳児が棒に色を塗る(5歳児は雪遊びに出かけていない)	Y児も参加
	1月18日(水)	柱に棒を差し込み, 余分な棒をのこぎりで切って柱完成	全員
	1月21日(月)	花火を作る。櫓の階段に色を塗っていないことに気づき塗る	3歳児・5歳児
	1月22日(月)	花火を描く5歳児を見て4歳児も作る, 櫓作り最終調整	全員
まとめ お祭りごっこ	1月30日~ 2月4日(月)	まだ何かしたいと言い, 市販の白い提灯に絵を描く	5歳児中心
	1月30日(水)	トルネードポテトを作って食べる, プロジェクトマップを作る	全員
	1月31日(木)	マップに写真を貼る	全員
	2月5日(火)	遊戯室に櫓を設置する	
	2月8日(金)	景品がないことに気付いて買いに行く	買いに行くのは5歳児
	2月12日(火)	たませんを作って食べる	全員
	2月13日(水)	景品に番号を付ける, 神輿完成, 提灯も設置する	全員
	2月20日(水) ~22日(金)	作品展当日・園長に本物の金魚を頼みに行く 神輿を担いで園の外を練り歩く, 本物の金魚をたらいに入れ, 翌日金魚すくいをする	全員
	2月28日(木)	バーベキューの計画を話し合う	全員
3月1日(金)	バーベキュー(焼きそばとフランクフルト)を楽しむ	全員	

けて通す方法を考えた。櫓の柱も同じように柱に穴をあけて差し込んで組み立てた。安定しない形の鳳凰をうまく塗るにはどうしたらよいか考えて、バケツに鳳凰を載せて塗ったり、網を2つつなげるのには結束バンドがよいと気づいたりしていた。

文字についても、5歳児は祭りのスケジュールを書いたり、やりたいことのリストを書いたり、「こいのぼり職人」にお願いとお礼の手紙を書いたりした。必ずしも文字が書ける子どもばかりではないが、意欲的にあいうえお表を見たり、友達に教えてもらったりして書いていた。手紙をポストに入れる経験もして、郵便の出し方も理解していった。

制作に必要な材料を考えて探したり、切ったり組み立てたりするための道具の使い方にも慣れていっており、活動の中で必要に迫られて、多様な力を習得している。

(2) 参加者の広がり子ども相互の関係

本活動は、保育者が一斉に設定保育のようにして実施したものではなく、自由遊びの時間に興味がある子どもが活動を始め、徐々に広がっていった。その経過は主に次の3つの時期に分けられる。

①5歳児が先導して、3、4歳児が参加していく

最初は5歳児が率先して活動をリードしていた。5歳児が鳳凰の画像をインターネットで調べてプリントアウトしてもらったものをみんなで見ると「かっこいいね」(4、5歳)「うわー、絵に描きたくなってきた!」「よっしゃ、描くぞ!」(5歳児)と、描いたり作ったりする意欲が高まっていった。

神輿の土台を作るのは5歳児であったが、周りで見ている他の年齢の子どもたちもいた。神輿の本体に色塗りをしようと5歳児が提案し絵の具を準備すると、3、4歳児も集まってきて一緒に塗った(6月8日)。5歳児も、やりたい3、4歳児に「やっていいよ」と筆を渡して受け入れていた。色塗りは1回で終わらず、次を「早く塗りたい」という5歳児に、保育者が「どこが何色なの?」と問うことによって、黒地の上に赤く塗る部分を明確にし、3歳児も参加していた。屋根をくっつけるのにたくさんガムテープで止めなければいけない時は、5歳児がやりたい4歳児を並ばせて、ガムテープを切って渡して、「ここに貼ってね」と教えていた。段ボールをくっつけ

る際には3、4歳児に持っていてももらったりした(6月12日、15日、19日)。自分たちでできることに応じて自然に分担し協力している姿が見られた。5歳児も、自分だけでは難しい時に「ここお願いね」と頼んだり、3、4歳児が「やってあげる」と手伝ってくれたりする異年齢の交流が見られるようになった。

このように神輿作りが進んでくると、次にやることが明確になって、子どもたちのほうから「次は色だね」「金色なんだよ」と声が出て、みんなで材料を探しに行つて3歳児も5歳児に教えてもらいながら飾りを作っていた(6月15日)。その後は、どんどん5歳児が次にやることを発言して活動が進んでいった。

色塗りは、3、4歳児がおおまかに塗った後に、5歳児が塗り残しや細かい所を仕上げていった。また、5歳児は、神輿を写真と見比べて、細かい部分の形や模様に基づき、同じように作ろうとしていた。神輿についている小さな鳥居を、割りばしを探しに行つて作ったり(6月22日)、鳳凰の足の指の数や向きまで同じように作ろうとしており、本物志向の5歳児の特徴がみられる。

②4歳児も色塗りから主体的になってくる

4歳児も、6月後半頃からは自分たちでできることを考えて主体的に動くようになってきた。神輿を何色に塗るのかすぐに返答したり、どのくらいの太さの筆で塗るか考えて選んだり、届かない所は椅子を持ってきて上に乗って色を塗ったりしていた。「今日何した?」の振り返りに、「ぼくたちは、黒色で塗りました」と堂々と答えていた(6月22日)。6月29日には、5歳児が神輿の飾りをつけていると4歳児が、「自分も何かやりたい」と言い、まだできていない金の円形の飾りを付ける部分を見つけ、自ら材料を探しに行き、金色の折り紙と黄色のビニールテープを持ってきた。たくさん作るためにどうすればよいか考えさせると、5歳児が折り紙を4枚重ねてホッチキスでとめて、まとめてはさみで丸型に切ることを4歳児に教えてくれた。いっぺんに4枚の丸ができたことに驚いていると、他の4歳児も集まってきて、参加する子どもが増えていった。

6月25日には、子どもたちの要望からかき氷を作って食べた。この楽しい活動によって子どもたちの意識が変わり、一部のやりたい子だけではなく、みんなが意欲的に参加するようになったという。7月9日の振り返りで

は、4歳児からも、次は屋根に太鼓のマークも作りたいという意見が出てきた。

7月27日も、神輿の担ぎ棒作りと鳳凰作りの2グループに分かれて、同時並行的に活動を行った。棒づくりは4、5歳児が行い、鳳凰づくりには、5歳児が考えて新聞紙を丸めて鳥の体を丸くしようとしていると3歳児が「自分もやる」と入ってきた。5歳児は、3歳が新聞を丸めてくれたことに「ありがとう」と素直に受け入れていた。

この頃には、子どもたち同士の助け合いも見られるようになってきた。鳳凰の羽を作ろうとした5歳児は、イラストを見て羽のギザギザを描いていくが、難しいので「あー、難しいわ。Sちゃんできる?」「できるよ、貸して!」「うわっ! すげえ」と、頼ったり認めたり、切る場所も分担して決めて、カッターで切っていた(8月16日)。太鼓のマークを描くときは、4歳児が描けないで困っていると5歳児が「あーこれちょっとむずかしいんだよね。かして」と言って、鉛筆でマークを書いて、切るだけにしてあげていた。「あーまた失敗しちゃったよ」「この形、むずかしいよね、これ見本にしていいよ」と難しさに共感し、保育者に頼らず、自分たちで何とかしようと助け合って達成していた(8月16、17日)。この頃には、毎日のように「鳳凰やろうよ」「神輿は?」という声が聞こえてくるようになった。

8月24日には、神輿にあけた穴に担ぐ棒を差し込むと、ゆるくて動くので、その隙間を埋めるために、紙を入れてみたり、黒のカラーポリを入れてテープで止めたり、試行錯誤していた。5歳児がそうやっている間、4歳児は、自分からテープを切って渡したり、飾りの金色の紙がはがれているのを見つけて、3歳児と一緒に貼り直したりしていた。8月29日には、神輿の黒地に白いテープがついてしまった部分を黒く塗り直そうと5歳児が話していると、4歳児が自分から絵の具を持ってきて色を塗っていた。

また、屋台の色塗りでは、4歳児が看板の反対側が塗れていないことに気づいて、3歳児と一緒に色を塗っていた(10月4日)。金魚作りでは、3歳児が始めると次の日に4歳児も「作りたい」と言って廃材コーナーに行つて材料を探していた(10月16日)。提灯作りも、自分たちで材料を用意して活動し、次に何をするかの見通しももって「(今日は)色を塗る!」などと発言していた(11

月)。

③屋台作りでは3歳児も主体的になる

9月からの屋台づくりでは、3歳児がチョコバナナの割りばしを探しにいたり、5歳児にやり方を聞いたりして積極的に参加するようになった。お店の屋根に色を塗る話をしている5歳児に対して、保育者が「何色で塗るの?」と尋ねることによって、3歳児も「赤がいい〜」、などと意見を出し、5歳児が「わかったよ」と認め、メモを書いていた。そして、活動終了時にみんなが集まったときにそれでよいか、5歳児がみんなに聞いていた。屋台の屋根の色塗りは、5歳児が老人ホームに行っていない日に3、4歳児に頼むと、3、4歳児はやる気満々であった(9月20日)。次第に3、4歳児も意見を言えるようになり、主体的になってきた。3歳児にとっては、バナナのイメージが持ちやすく作りやすかったことが影響している。チョコバナナの色が乾くまで「次何する?」の保育者の問いかけに、3歳児が率先して「金魚!」と応えていた(10月15日)。

10月後半に3歳児がうちわ作りをすると決まってからは、絵の具を自分たちで準備したり、うちわを探しに倉庫に行ったりするようになった。今日何をするか確認すると、子どもたちのほうから、「これこれ!」と材料や作りかけのうちわを持ってきてみんなに見せていた。次に何をするか見通しをもって意欲的に取り組んでいることがわかる。

5歳児の浴衣の制作は、家から持ってきた浴衣の型紙を作ることにし、一番大きい子の背に合わせて長さを測り、長さを忘れないようにメモし、型紙を作った(10月29日)。しかし、5歳児だけではなく、布のどこどこを貼り合わせるかなどを、3歳児もよく見ていて、5歳児に「ここまでだよ」と教える3歳児もいた(10月31日)。

祭りの準備がほぼできあがった1月30日には、以前から約束していたトルネードポテトを作った。じゃがいもを専用カッターで切っていくのが硬くて苦戦したが、保育者はまず「やってみる」という子どもたちの思いを大切に、体験させてみた。保育者を頼らずに「最後までやりたい」という思いが強く、やり遂げる力がついていると感じられた。

3. プロジェクト活動の展開方法

プロジェクト活動の展開過程において、効果的だったと思われる保育者の働きかけや環境設定の工夫について、分析する。

(1) 子どもとの相談と振り返り

お祭りをテーマにすることになって、毎回、朝の集まりで今日は何するかを確認したり話し合っていた。以前何と言っていたか、どこまでやったかを思い出させたりしながら子どもたちに問い、子どもたちから要望のあった活動を行っていった。また、毎回の活動の終わりに、今日何をしたかを、それぞれの活動チームから発言してもらい、次は何をするか聞いていた。このように話し合いをもつことで、その日にやったことの共有ができ、次に何をするかを計画したり自覚したりし、意欲を高めることになる。

この話し合いの司会については、6月25日には、振り返りの会の時に、5歳児に司会をしてもらった。「今日は何したのか、聞いてみて」「次は何するのって聞いてみて」と援助しながら司会をすると、3、4歳児が積極的に答えていた。

6月29日には、振り返りの会で、5歳児がみんなに相談したいこと―神輿の飾りを全面につけるか（最初はそのつもりで数を数えて作ったが、実際に付けてみると違和感を感じて悩んでしまった）、どうしたらよいか意見を聞こうとしていた。7月3日に意見を聞くと、付けたほうがいい人の手がたくさん挙がったので、付けることにした。活動が終わったら、輪になって振り返りをするのが子どもたちもわかってきて、7月からは保育者に言われなくても、自分たちでまわって座るようになった。

8月16日には、神輿や鳳凰のどこを作ったか報告した後、太鼓のマークを今日2つ作ったから、5歳児は「(明日)あと2つ作ります」と自分から計画を説明した。翌日の朝も「あと2つ作るよ」「今日はもう一つの羽を切ります」などと、子どもたちから明確な計画が発言されるようになった。8月下旬には、神輿も完成間近となり、毎日のように「鳳凰やろうよ」「神輿は？」という声が子どもたちから聞こえてくるようになった。

作品展が終わって作ったものを燃やすときに、バーベキューをすることになっており、お好み焼きと焼きそばのどちらがよいか5歳児に司会をして話し合ってもらうことにした。やりたい方に手を挙げたもらう方式で、少数派のお好み焼きの子どもにも、「焼きそばでもいい？」と聞いて、了承を得て決定している（2月28日）。違う意見の友達にも配慮して、全員の合意をとることができるようになっている。

これらの話し合いによって、要求を出し合い、活動の予定・計画や結果を共有し、意欲的・創造的に活動に参加することができるようになっているといえる。

(2) 子どもの発想や計画を活かした援助

①子どもの声を聴く

保育者から提案することはほとんどなく、「何やっているの?」「どうしたいの?」と子どもが探究しようとしていることを聴いたり、「どうやって調べたらいい?」「何で作る?」「どうしたらいい?」「どんな形でどんな色にしたい?」と子どもたちのアイデアを引き出したりしていた。

また、子どもたちのつぶやきもよく拾っている。かき氷を作って食べる計画を話しているときに「月曜日、何するんだった?」の質問に「唐揚げ」と答えてしまった子がいても、「じゃあ、今度やろう」と取り入れた（6月22日）。神輿の屋根を作る前には、屋根の形を保育者が「どんな形?」と聞くと、「三角」から連想して、「あーお腹すいたわ」「おにぎり食べたい!」という子どもの声があり、焼きおにぎりを作る活動を入れた。おにぎり作りは、お米をとぐところから行い、とぐ水の色の変化や水の量などに子どもたちが気づいていった。2月12日には、子どもたちの要望である「たません」も作って食べた。

作品展当日、金魚すくいやサメ釣りを楽しんだ後、それまでに子どもたちから聴かれた声をもとに、保育者が神輿を担ぐことを提案して、園の周りを練り歩いた。槽の上でも、運動会で披露した踊りを踊り、和太鼓を叩いて楽しんだ。そして、自分たちの要望により本物の金魚すくいをして家に持ち帰った子たちは、金魚の飼い方を知りたがり、本を探して5歳児で回し読みしていた（2月22日）。自分たちの要求に基づいた活動であることか

ら、より自覚的な姿が見られる。

②イメージの共有のための画像・描画・体験

イメージをもち共有するために、子どもたちが探した神輿の写真を掲示しておいたり、祭りに行ったときの屋台の写真を見せて掲示したりしていた（6月22日）。

子どもたちは、前年度までの経験から、興味をもったものを作ってみたいという思うようになっていた。しかし、いきなり作るのではなく、保育者は神輿を作りたいという5歳児に「おみこしを作るにはしっかり見ていないとね。どうしたらいいかな？」と問いかけていた。すると、子どもから「描いてみる」という提案がなされ、写真を見ながら描いてみることによって、イメージがより明確になった。そのことによって、どのくらいの大きさの段ボール箱が必要で、どのように組み合わせればよいか、5歳児同士で相談しながら作っていくことができた。平面で表現してから立体への表現に移ることも以前の経験によるものであるが、その段階を踏むことでよりわかりやすくなっている。

おにぎり作りでは、3歳児のおにぎりは丸くなってしまったが、5歳児にとっては手で立体的な三角を作って体験したことが、その後の神輿の屋根づくりのイメージを鮮明にすることにつながった。そのようなこともねらいながら、絵を描いたり本で調べたりと、少し難しいことが続いたので、気分転換も図りながら楽しいことを入れてみたという。このように活動に変化をつけることも必要であろう。

7月はプールの活動が中心になり、久しぶりのプロジェクト活動だったので、以前子どもたちがプリントアウトした鳳凰の画像を集まった子どもたちに見せると、子どもたちは「羽が広がっている」「顔が怒っている」「おなかがポヨポヨしている」などと言いながら興味深く覗き込んでいた。イメージが共有できたことから、段ボール、折り紙、新聞紙でお腹を膨らませる、などというアイデアが出され、神輿の上に牛乳パックを並べてみて、牛乳パック2個でつくることになった。

③自由に探せる廃材コーナー

この園には、教材の棚があり、糊や絵の具、ボンドなどは自由に使えるようになっている。廃材コーナーもあり、ダンボールや新聞紙、牛乳パック、テープ、いろいろな紙、針金、のこぎり等が置いてあり、子どもが自分

で探しに行けるようになっている。また、普段使わないものなどは倉庫に入れてあり、子どもたちが保育者に頼んで倉庫を探すことも行っている。必要な物はほとんど子どもたち自身に準備させており、このような環境が、子どもたちの自主性を引き出している。

④子どもに考えさせ試行錯誤させる

保育者は、常に正解を与えずに、子どもたちに試行錯誤させている。手紙をコピーするときは、わざと紙の置き方を教えず、表裏を反対に置いて、裏の文字が書いていない面がコピーされてしまったり、字が薄くてうまく写らなかったりした時に、どうしたらよいか考えさせている。神輿の本体を作る時も、ダンボールをどう組み合わせさせてくっつけるとよいか、隙間ができてしまった所をどうするか、試行錯誤しながら進めていた。

神輿の担ぎ棒は、発砲スチロールで作ろうとして、保育者が踏んで割れてしまったことから、折れない棒を探しに行った。太い棒と細い棒を4、5歳で探して持ってきて、どちらがよいか神輿に合わせてみて考えていた。保育者は棒が何本いるのか考えさせたり、4本の長さが違うことに気づいた子どもたちに「何かいい方法あるかな？」と聞いてみて、同じ長さに印をつけてのこぎりで切ることを考えさせたり、棒を神輿にどうやってつけるのかは、保育者が玩具のミニカーを近くに置いておいて、穴をあけて棒を通すことに気づかせたりした（7月27日）。

屋台のチョコバナナや金魚が少しずつできていくと、子どもたちは、それを使ってちょっとした買い物ごっこを始めていた。サメ釣りも、竿が1本できるとそれでサメを釣って遊び、難しいかどうかやってみて改良していた（10月25日）。作りつつ遊ぶ、遊びつつ気づいて改善したり足りないものを作ったりするという、往復が効果的に機能している。

保育者が祭りの櫓の写真を見せると、子どもたちはそれを作りたいがり、廃材の太い筒を見つけ、それを柱にすることを考えた。櫓の台（テーブル）の下の側面に紅白の幕を付けるのは、赤と白のカラーポリを交互に貼っていったが、角や最初と最後の部分に隙間ができてしまったので貼り直したり、長さがそろっていなかったので切ったり、切りすぎてセロテープで付け足したりと、試行錯誤していた（1月11日）。

また、保育者は、時々子どもたちに考えさせる質問を

していた。神輿の飾りを作りたいという5歳児に、「いいよ、それ何個作るの?」と聞いて、数を確認させ、トイレットペーパーの芯が何個あればよいか(1本から2個できる)考えさせたり(6月12日)、飾りのマークは何個いるのか、棒は何本いるか、焼き鳥は何本いるのか、クラスの人数は何人で、金魚は何匹いるのか、など、数に興味のある子どもたちに、質問を出していた。また、バナナの色は何色か問を出したりしたり、金魚すくいのポイは、「どうやって一番破れやすい紙を見つけるの?」と問いかけていた。スウェーデンのプロジェクト・教育的ドキュメンテーションでは、「保育者の役割の一つは、子どもの疑問や探究を深め、広げることができるような質問を出すこと」だと言われている⁸⁾。

以上のように、保育者はヒントを出すこともあるが、基本的には失敗も見守りながら、子どもたちに気づかせたり、問を出して考えさせたりしていつている。

⑤ イベント等の日程も子どもと保育者が話し合って決める

神輿が完成したお祝いに焼き鳥パーティーを行う予定だったが、台風で延期になってしまった。園長に神輿に付ける飾りの作り方を教えてもらって関係が深まったことから、子どもたち(4歳)は、自ら事務所に行って「園長さん、焼き鳥いつやる?」と日程を聞き、材料をどこで買うか、栄養士に聞きに行ったりしながら考えていた。そして、そのことをクラスに戻ってみんなに話して共有していた。さらに、何をいくつ買ってきてもらうか、3、4歳児のリクエストのイカやじゃがいもも付け加えてメモに書いて、事務室の主任に渡した。「買ってきたら見せてね」と頼み、自分たちで冷凍庫に入れ、その後冷蔵庫に移すのを頼むところまでやっていた。大人だけで決めてしまうのではなく、子どもたちが園長らと話し合う機会を作ったことが重要である。

サメ釣りの景品がないことに気づいた子どもたちは、話し合って、5歳児が景品を買いに行くことになった(2月8日)。買いに行く日は、「5歳児がみんな揃っている日」「少し遠いので主任の大きな車がある日」「運転している主任がいる日」の3つの条件がそろった日に行くことを保育者が提案したので、その話が出てからは、毎日のように、5歳児が人数を確認したり、大きな車があるか聞きに行ったりして、楽しみにしていた。5歳児はクラス

の代表として買いに行くことを3、4歳児にもきちんと伝え、帰ってきたら最初に3、4歳児に見せて説明していた。クラス全体のつながりや待っている人たちの思う気持ちが育っている。

(3) 年齢による参加の違いを意識した援助

① 5歳児が調べたことの発表・共有

朝の会や活動の終わりの話し合いには、クラス全員が参加しているが、パソコンで調べること、祭りのスケジュールを書くこと、それをコピーして各家庭へのお手紙にすること、図書館に行って本を借りてくること、神輿の絵を描いて神輿の土台を作ることなどは、5歳児だけの活動になっていた。しかし、集まりで全員で確認したことなので、借りてきた本をみんなで見たり、神輿の絵をみんなに見せたり、5歳児が一緒に一つの神輿を絵を描くのを他の年齢の子どもたちが回りに集まってきて見たり、話しを聞いたりしていた。そして、5歳児は、自分たちで描いたものは「みんなの前で見せる!」「みんなに話す」と言い、発表することが当たり前になってきた。自分の思いを声に出すことが徐々にできるようになっていった。

② 子どもの発達に応じた保育者の援助の仕方

神輿の飾り作りを5歳児がやっているのを見てやりたがった3歳児には、テープを切ることは少し難しいので、保育者が短く切ったものを貼るようにしていた(6月12日、15日)。このように、年齢によってできることを考慮して、少しずつ保育者の援助の仕方を変えている。

5歳児が1人1つずつサメをそれぞれ工夫して作ったのを見て、4歳児たちも作りたと言った時は、2人で一つのサメを作ることにした。テープを切る人、ペットボトルに貼る人、おさえている人など、協力しあっていた(10月23日)。

③ 2グループに分かれて活動する

作りたいものがはっきりしてくると、2グループに分かれて同時並行的に活動を進めていた。6月19日は、朝、今日やることを聞くと屋根の色を塗ることと、神輿の胴体につけたトイレットペーパーの芯を塗ることとの2つが出てきたので、2つに分かれてやることにした。しかし、このグループは、メンバーが固定したものではなく、作り終わったらもう一方の活動グループに行く子どもも

おり、柔軟に考えられていた。

7月3日も、神輿に飾りをつける人（5歳児1人と3、4歳児）と鳳凰を調べる（5歳児4人）の2つに分かれて活動をしていた。鳳凰の写真をインターネットで探しプリントアウトしてもらおうと、みんなに見せて、3、4歳児も「かっこいいね」と「本当に金だ」と感動していた。年長児たちは「絵に描きたくってきた」と、鉛筆で書き始めた。飾り付けのグループは4歳児も積極的に材料を探しに行き、5歳児がボンドを塗る所や貼る所を教えていた。

屋台を作るときには、屋台の屋根と看板を作り始めた5歳児に対して、「屋台もいいけど、置いてあるもの作りたいね。一緒にできるかなあ、何からやりたい？」と子どもたちから挙げられていたものを一つひとつ聞いていくと、チョコバナナから作ることにになり、屋台づくりをした子どもとチョコバナナを作りたい子どもに分かれて作り始めた。屋台の看板などは3、4歳児には難しく、このままいくと、5歳児のペースで活動が進んでしまうことも危惧しての問いかけであったといえる。

④3、4歳児に役割を持たせる

5歳児のみの活動にならないように、保育者が、3、4歳児を指名して、役割をもたせることもあった。6月25日には、かき氷の水を給食室にもらいに行ってもらった。楽しいかき氷の活動を入れたことで、子どもたちの意識が変わり、一部のやりたい子だけではなく、みんなが意欲的に参加するようになっていった。6月29日の振り返りの会では、4歳児も、自分が飾りを貼った所や、次にすることを発言しており、神輿の完成が近くなってきて、やる気が一段と強くなったと感じられた。

屋台の屋根の色塗りは、5歳児が老人ホームに行っていない日（9月20日）に、頼まれた3、4歳児が張り切って色を塗っていた。櫓の柱の色塗りは、5歳児がスキーに行っている間に、3、4歳児にお願いして塗ってもらうことになり、3、4歳児はやる気満々だった。棒の色を塗るのも、長さが長いので、立てて塗っていると背が届かなくなってしまったが、どうするか尋ねると、「ひっくり返せばいい」と子どもたちのアイデアで上下をひっくり返して塗っていた。4歳児は全部で何本で、あと何本塗ればよいかも、5歳児が残っていたメモから確認していた（1月17日）。

焼き鳥パーティーでは、焼き鳥を袋から出すのを3歳児に、じゃがいもを洗うのを4歳児にお願いしていた。しかし、5歳児が包丁で切っていると、4歳児もそれを見て憧れ、「やってみたい」というので、保育者と一緒に切ってみることにした。保育者には、役割を分担して全員で取り組むことによって、みんなでやったという体験をして団結力を高めたいというねらいもあった。

⑤年齢によって異なる方法で行う

8月9日の神輿の担ぎ棒の色塗りでは、何を使って絵具を塗るかを各自に任せると、3歳児は手で塗っており、4歳児は筆や刷毛を探してきて塗る子どもが多く、発達の違いによって自分たちで考えた方法で活動していた。棒を横にして塗っていたので、床についている方の面が塗られていないことに気づいた5歳児は、棒を立てて塗ることを提案すると、3歳児も一緒に持っていた。

金魚すくいの金魚を作るときには、3歳児には、保育者がビー玉をカラーポリで包んでモールで留めることを提案し、色を子どもたちに選ばせた。4歳児には廃材置き場と一緒にいって、金魚の形に近い発砲スチロールを見つけ、それに色をつけることにした。水彩絵の具で塗って水の中に入れると色が解けてしまうことに気づかせると、子どもは油性ペンで塗ることにした。5歳児は自由に自分の発想で作った（10月15日～24日）。5歳児は、4歳児が金魚を作っているのを少し離れた所で見えて、自分がサメの歯を付ける時に、金魚の時に何を使ってくっつけたか4歳児に教えてもらっていた。

花火を描くときは、5歳児は絵本に出てきた花火の場面を参考にして、黒い画用紙に鉛筆で花火の輪郭を描き、筆で蛍光塗料の絵の具を塗った。それを見た4歳児もやりたくなったので、白い画用紙に蛍光塗料で色を塗ってもらった上に保育者が花火の形の輪郭線を描き、それをはさみで切って、黒い画用紙に糊付けすることにした。3歳児は、自分たちで丸の形に貼ることは難しいので、黒画用紙を丸く切った土台を渡し、光るテープを貼った間に蛍光色の絵の具を指で押して花火の形にしていた。それぞれ自分の花火を作ることができ、満足そうであった（1月22日）。

2月12日のたません作りでは、5歳児は自分で卵を割り、フライパンに入れて焼き、せんべいにのせた。3、4歳児は保育者と一緒に行った。

⑥作るものを年齢によって変える

屋台の遊びを作り終えると、次にやりたいこととして、浴衣、うちわ、提灯、花火が出てきたが、浴衣は難しいので5歳児が作って、4歳児は提灯、3歳児はうちわを作ることを5歳児が提案し、3、4歳児にお願いした（10月26日）。ハローウィンのかぼちゃの提灯が部屋に飾られてあったので、イメージを持ちやすかったといえる。うちわを作る材料を考える際に、保育者はうちわの数（3歳児の人数）を一緒に確認し、紙を染めて作りたいという子どもたちに「このうちわの紙はどんな紙でできているかな?」「なんかザラザラ～」と確認し、そのような紙を探しに行った。4,5歳児よりも丁寧に確認していた。

⑦子どもの発想を大事にする

4歳児が風船に紙を貼って提灯を作る時は、紙をちぎる大きさも子どもによって違いがあるし、紙に糊をつけてから貼る子どもと、風船に糊をつけて紙を貼る子どもがいた。保育者が黙っていると、友達のやるのを見て、次第に風船に糊を塗ってから貼る人が増えていった（11月1日）。見本の提灯を見て赤と白の縞に塗ることになったが、白色の紙の上に塗るので、白は塗らなくてもよいのだが、4歳児は、白色も絵の具で塗って、どこまで塗ったかわかりにくくなっていった。しかし、保育者はその発想を大事にして、あえて何も言わずに見守っていた（11月5日）。提灯の上下の黒枠の部分は、使い終わったセロハンテープの芯の輪が、大きさがちょうどよいことを子どもたちが見つけ、黒テープで巻いたうえで、透明テープで提灯にとめることを考えた（1月8日）。

(4) ドキュメンテーションの活用方法

ドキュメンテーションには、「視覚教材による記録や、子どもたちの対話やグループディスカッションの聴き書きや、写真やスライド、重要な瞬間や活動のビデオテープや子どもたちが制作した作品や建造物のコレクションとともに手書きのメモも含まれ」⁹⁾る。そして、ドキュメンテーションをもとにして、学びの過程を可視化し保育者が子どもと、そして同僚同士で話し合うことが教育（学）的ドキュメンテーション（Pedagogisk dokumentation）となる。教育（学）的ドキュメンテーションを取り入れる目的は大きく三つあると言われる¹⁰⁾。保育者個人又は保育者チームが教育活動を見直し改善する

ため、子どもの意見を聴くため、そして保護者への情報提供や保護者からの意見を取り入れるためである。本実践では、この三つが意識されてドキュメンテーションが活用されていた。

①視覚化することによってイメージを共有する

インターネットで調べた祭りのスケジュールや神輿の写真を掲示しておき、神輿を作りかけて置いたが、それらが、ドキュメンテーションになっている。その日作った物をみんなに見せてどこまでできたか確認したり、どう作ればよいか写真を見て考えたりしていた。鳳凰づくりでは、5歳児は写真を見て、鳥の足の指を数えて確認し、割りばしとストローで、足を作っていた（7月27日）。

7月3日に2グループに分かれて行った活動では、お互いにできたものを見せ合った。4歳児も自分がやった部分を「ここやった」と一言だがアピールしていた。5歳児の姿を見て、自分も同じようにやったり発言したりしたいという、憧れをもっているように担任は感じていた。鳳凰の絵を描いた5歳児がみんなに見せると、「今日描かなかったから、描きたいな」と、意欲をみせる子どももいた。そして、それぞれ次にやることを発言していた。子どもたちの活動を認め合い、意欲を高めることに作用しているといえる。

②やりたいことをリストアップする

子どもたちがやりたいと言った屋台の種類など（かき氷、焼き鳥、トルネードポテト、チョコバナナ、金魚すくい、サメつり、輪投げ）のメモを、大きな字で書いて、掲示してある（6月22日）。この掲示は、5歳児が発案したもので、3、4歳児にわかりやすいだろうという配慮からであった。

また、やることのリストの掲示の中に、あとから追加した「唐揚げ」が書いていないことに気づいた5歳児は、「からあげ」の字を教えてもらって、自分でクレヨンで書き込んでいた（6月25日）。自分の思いが通り、実現可能になったことで、とても喜んでいて、期待をもって活動に取り組むことができるとともに、自分が認められたという思いをもつことができると考えられる。

③過去の記録を参考にして考える

9月12日に、屋台を作り始めることになった時、保育者は、前年度にアイスクリーム屋さんの屋台を作ったこ

とを思い出させようとしたが、よく覚えていないという子どもたちがいた。「写真見ればいいじゃん」という5歳児からの提案があり、事務所のコンピュータに入っている記録の写真を探しに行った。そして、その写真を見ながら、屋台の骨組みになる材料(折り畳み式物干し台)を倉庫に探しに行き、汚れに気づいて自分たちで雑巾で拭いていた。サメ釣りのサメの色を塗るときも、図鑑で調べるとともに、2年前にサメを作ったことを思い出させると、その時の写真を見ていた。

④プロジェクトのまとめのドキュメンテーション

1年間、クラスで何を行ってきたかの振り返りを1月30日に行った。やってきたこと、作ったものを模造紙にクモの巣チャートの5歳児が描いて、視覚化した。字が読めない子どもにもわかるように、写真も子どもたちが貼った。かき氷や焼き鳥もしっかり子どもたちの心に残っていた。このようにして振り返ることによって、改めて自分たちのやってきたことを確認し、充実感と自信を持つことができると考えられる。

⑤保護者に向けてのドキュメンテーション

プロジェクト活動のその時々写真は、コメントを付けて玄関に貼ってあり、家庭に知らせていた。作品展では、それまでの取り組み過程を冊子にして家庭に配布し、感想を各家庭から書いてもらった。結果だけではなく、その過程も理解してもらおうようにしている。

(5) 保護者や地域の人々との連携

①家庭との連携

お祭りは各家庭でも行くことが多いが、保育者は意識的に家庭でお祭りに行くしかけをつくらせている。子どもがインターネットで調べて、保育園の夏祭りも付け加えたお祭りのスケジュールを紙に書き出したリストを見ながら「祭りってだれと行く?」「祭りに行きたい時って、何て言うの?」と家庭での伝え方を確認したり、子どもたちと相談して、5歳児の提案でお便り帳のカレンダーに祭りの名前を書いたシールを貼って忘れないようにしたりしていた。また、屋台について、「どんな食べ物屋さんや、ゲームがあるか見てきてね」と視点を明確にして伝えていた。

10月には、浴衣の見本として家にある浴衣を持ってきてくれた家庭があった。子どもたちの活動をドキュメ

ンテーション等を通して理解していたからの協力であったといえる。

②地域の図書館の活用

わからないことは、図書館に行って本を借りてくるということも、これまでの経験の中で子どもたちに身に付いていた。5歳児がもっと調べるようになった時、保育者は「お祭りのどんなこと調べる?」と問いかけた。神輿や浴衣(名称はわからないので調べる)が挙げられ、視点を明確にしてメモをもって図書館に行っていた。子どもたちも何を調べるのかしっかり覚えていて、本を探す姿が見られた。図書館のどこにお祭りの本があるかも、保育者は教えずに子どもたちに探させている。祭りの「ま」という文字から探していて、子どもらしい行動であった。

③他園での経験

子どもたちに多様な体験をさせるために、姉妹園に獅子の練り歩きを見に行った(8月6日)。行く前日に、園長は男の獅子と女の獅子がいることを知らせ、獅子の面を持ってきてその違いを見比べて気づかせ、興味を持たせた。実際に法被を着て手ぬぐいとうちわを身に付けて獅子を持って園の周りを練り歩く経験をしたことが、のちに自分たちの作った神輿を担いで練り歩きたいという要求につながった。そして、やりっぱなしではなく、園に戻って獅子の写真を見ながら話をしていると、子どもたちから「また絵を描こうか」と言い出した。少し難しいので、5歳児だけが描くことにし、できた絵は、8月16日にみんなの前で見せて、説明した。実際の体験から、頭にのせると重くて頭が痛くなることなどを、話していた。

④「専門家」への協力依頼

鳳凰の色を塗るためにどうするか考えていると、月刊絵本に出てきたこいのぼり職人が金色の絵の具を持っているから、もらえばいいという意見が5歳児から出てきた。園長と主任に相談して、「こいのぼり職人に金色の絵の具を頼みたい」という願いを叶えるため、子どもたちに手紙を書いてもらい、切手を貼って、ポストに投函した。実際はこいのぼり職人ではなく園長の知人宅に手紙が届くようにして、金色の絵の具を用意した(8月下旬)。子どもたちは、絵の具が届くのを毎日楽しみにしていた。そして、絵の具が届いて、みんなが見守る中、

5歳児が鳳凰を金色に塗ると、「きれいにできてきたね。こいのぼり職人にありがとうって手紙書きたいな。」と言い出し、みんなで相談して、鳳凰の写真を入れて、お札の手紙を書くことになった。手紙を書く時に、何を作ったかわからないから写真を送ろうと子どもがアイデアを出し、子どもにカメラを渡して撮ってもらっていた。

また、金魚すくいをやったことがないという子どもは、金魚やそれをすくうポイを作っていく中で、作った金魚は動かないので本物の金魚すくいをやりたくなり、園長にお願いすることになった（10月23日）。

子どもたちは、困ったときは園長や専門家をお願いすればよいという、ヘルプを求める方法も学んでいる。これは、ロジャー・ハートの提唱した子どもの「参画のはしご」でいうと一番上の段階「子どもが主体的に取りかかり、おとなといっしょに決定する参画」にあたる⁹⁾。

Ⅲ. 特別な配慮が必要な子どもの発達と支援

集団の活動に参加することが難しかったり友達とのトラブルが多かったりした4歳児のX児とY児のプロジェクト活動への参加の様子と成長について分析する。

1. X児の参加と成長

(1) 4月の姿

X児には知的障害がある。自分で遊びこむ姿が少なく、ふらふらしていたり、座ったりしていることが多かった。追いかけてもらうことは好きである。年長児が好きで、よく遊んでもらっていた。友達のやっていることに興味を持って自分もやろうとすることもあったが、欲しいものを取り上げてしまうこともあった。会話については、自分の思いが強くなってきて、一生懸命伝えようとするが、言葉になっていない時もあった。「ありがとう」「かして」など、自分から言うことが時々できるようになってきた。制作の場面では、感覚が過敏で糊を触ることが難しかったが、こいのぼり作りの時には自分で糊を触って付けることができた。はさみの使用は一人では難しく、保育者が少し手を添えて線の上を切ることを伝えていくと一回ずつ切っていくことができた。制作中は集中力が途切れ

てしまうこともあるが、以前に比べると積極的に取り組んでいた。

(2) X児のプロジェクト活動への参加と変化

X児は、5月は「お祭り」という言葉を聞いてイメージできたのか、嬉しそうに保育者に話していた。まだ同年齢の友達と一緒に遊ぶことは難しく、5歳児のやっていることに興味を持って同じことをやろうとしたり、その場へ行ったりすることが見られた。5歳児が神輿の写真パソコンで調べていると、「これがいい」とたくさんの画像中から気に入った写真を主張していた（5月15日）。おにぎりづくりでお米をボールに入れる時には、「やるやるー！」と一番に主張し、順番にカップで測ってボールに入れて意欲的に取り組んでいた（5月25日）。

6月もX児は、部屋のみながいる所より、部屋の外で人のいない所で遊んでいることが多かった。しかし、6月8日に5歳児が中心に神輿を黒く塗っていると、「自分もやるー」と汚れるのが苦手なX児も筆を持って色塗りに参加してきた。絵の具が手についてしまうと「ギャー、やめて！ やめて！」と言って手を洗いに行く姿が見られたが、また筆を持ち、手洗いに行くことを繰り返していた。汚れるのは嫌だがやりたい気持ちがあり、楽しんでいるようにも見えた。神輿の写真を自分で選んだこともあり、興味が持続し、簡単な作業なら参加できていた。

偏食のあるX児だが、さすがにかき氷の時は、給食室でスプーンが欲しいと積極的に伝え、もらってきたシロップのふたを自分もあけたいと言い、「メロンの匂い！」と喜んでいて。

7月のプロジェクトの話し合いでは、輪の中に保育者が誘うと入ってくることもできた。制作にはそれほど参加していないが、みんなで鳳凰の写真を見てみると「見せて！ 見せて！ 鳳凰」と積極的であった。その順番を待つ時は、なかなか待てず怒っていた。8月の鳳凰作りの活動では、少し難しい内容が多く、別のことをして遊んでいることが多かった。

9月には、好きな友達ができ、名前を憶えて呼ぶことができるようになった。友達にも興味を持ってきて、真似するなどの姿も見られた。他の友達とも関わられるように名前を伝えると、その場では言うことができるが時間

が経つとすぐに忘れてしまう。散歩に行く時に、これまでは保育者と手をつないでいたが、同年齢とはまだ難しいが5歳児と手をつないで歩くことができるようになってきた。言葉も増えてきて保育者に話している姿が増えてきた。保育者に聞いてもらえていないと感じると「聞いてる？」と要求していた。相手の姿を見て、自分の話を聞いてもらえているかどうかわかるようになってきたので、保育者は話や気持ちを十分受けとめていくようにした。プロジェクト活動では、屋台の屋根の色塗りに興味を持って参加する姿が見られた。なんとなく、何の活動をしているかわかっており、それに関係のある言葉を話すこともあった。体操や盆踊りも友達や保育者の真似をしながら自分なりに楽しんで参加する姿も増えてきた。

チョコバナナ作りに参加して、形が明確になると、10月には自由遊びの時に粘土でバナナを作り、棒にさして「チョコバナナ買って来た」と保育者に見せてくれた。少しずつ会話になるようになってきた。5月には手が汚れるのを嫌がっていたが、屋台の色塗りを筆で楽しんで塗っていた。振り返りの会のとき、金魚を「(自分も)作った!!」と発言していた(10月16日)。自分から友達にかかわる姿はないが、X児に話しかける子が4、5歳児で2、3人でできた。

12月にはクリスマス会(音楽と劇)で、歌の歌詞を覚えてテンポは少し遅れてしまうが歌えていた。発表会では、自分の役になりきり大きな声でしっかりセリフも言えた。人前だといつもより気持ちが昂ってしまい、興奮気味だった。この頃、同じ4歳児の2人とごっこ遊びをしている姿が見られた。

2月には、友達との関わりも増えてきて、一緒に遊ぶ姿も見られるようになってきた。その中で、玩具の取り合いになった際には、まだ自分の思いが先行してなかなか相手の思いを汲むことは難しかった。おしゃべりが好きで、同学年の友達の名も以前よりも覚えるようになった。歌にも興味を持つようになり、皆が歌っているのを聞いて覚えて口ずさんでいることもあった。制作の時には、以前ほど抵抗を見せることなく楽しんで取り組もうとする姿が見られるようになってきた。

以上のように、楽しい雰囲気や活動していると、X児は興味を示し簡単な活動であれば参加するようになって

いった。5歳児に支えられて神輿の写真を自分で選んだことから、何を作るのかイメージが持てていることが、活動への意欲にもつながっていると考えられる。異年齢の活動を通して、5歳児からの関わりにより、人間関係が広がっていている。また、自分が作ったものを発表し認められる場があったことも、自信や次への意欲につながっていると考えられる。

2. Y児の参加と成長

(1) 4月の姿

Y児は、入園式のような静かにしないといけない状況でも感情を抑えることができず、声を出してしまっていた。衝動性が強く、遊びでは、ケンケンスクーターが好きで猛スピードで門の方まで行ってしまっているので、色の線の所までと伝えているが、時間が経つとまた同じことを繰り返してしまっていた。同じ4歳児の仲の良い友達と一緒に場面になると、玩具の取り合いや遊びの延長で本気になってしまいトラブルが多かった。小さな生き物が好きで、外に出ると生き物を探している姿が見られた。会話は、3歳児の時のオウム返しはなくなり、気持ちがあればきちんと応答できるが、気持ちが違うところがあると、何を話しかけても答えなかった。制作することを好み、他の子がやっていると自分の順番を傍で待っている姿が見られた。傍で見てやり方を覚え自分の番になるとスムーズに行えた。

(2) Y児のプロジェクト活動への参加と変化

5月にY児は、自由遊びの中で鉄砲での的あてを楽しんでいた。「鉄砲だけでなく、輪っかのあるんだよ」と友達が話していると、「丸いのあったよ」と水筒のコップを指していたことからわかるように、イメージが掴めていなかった。他児が輪をもってきたので理解でき、さっそく輪投げをやっていた(5月8日)。

Y児は、楽しいことには気分が高揚してより積極的になる。焼きおにぎり作りでは、お米が炊けるのを待って、醤油で味付けすることを一番に発言し、率先して醤油をつけてくれた(5月25日)。

また、Y児は、5歳児が楽しそうなことをしていると寄ってきて興味を示して見ていたり参加したりすること

が多かった。5歳児が中心になって神輿の土台を段ボール箱を組み合わせて作っている時も見ていて、ガムテープと箱の隙間ができている所を教えてくれたりしていた(5月28日)。神輿の下の方に金色の飾りをつける時は、5歳児がやり始めたところに他の4歳児と一緒にやってきて、「キラキラじゃん！ これ貼ってるの？」と興味を示し、参加していた。「もっとやりたい！」と積極的に、5歳に教えてもらって貼っていた(6月19日, 22日)。黒く色塗りする時も同様に「やりたい」と表明し、5歳児に筆の置き場所まで連れて行ってもらって、どこを塗るか教えてもらい、色を塗ることができた。振り返りの話し合いの時には、「ぼくたちは、黒色で塗りましたー」と嬉しそうに発言していた。

6月29日に、5歳児が神輿に貼る金色の紙を重ねて切ろうとしている時も、「何してるの？ 僕もやってあげる！」と参加してきて、振り返りの会では、自分が貼った個所を「僕はあそこ！（貼った）」と一番にアピールしていた。7月には神輿の棒に興味をもったり「僕もやりたい」と言ったりして、どんなことでも意欲的に取り組む姿が見られた。

9月には5歳児が神輿の飾りを作っているのを見て、糊でくっつけたいという4歳児がいると「僕もやりたい」と参加し、同じ4歳児に教えてもらいながら糊で貼るなど、簡単なことなら積極的に参加していた。屋台の色塗りなども率先して行って、自分のやったことを得意げに他の人に伝えていた。しかし、7月26日の鳳凰作りのように、少し難しい活動になると、牛乳パックを切り始めたけれどすぐに飽きてしまってやめてしまった。8月のプロジェクト活動では、金の絵の具が届いた時は興味をもって見て「蜂蜜みたい」と発言していたが、少し難しい内容が多く、別のことをして遊んでいることが多かった。

Y児は、相手の意を汲んだ会話は難しいが、自分のやりたいことははっきり主張し、一方的なおしゃべりが止まらないこともあった。5月には、朝の会などみんなが集まり出欠をとっている時に隣の子に話しかけたり、ふざけて手を出したりしてしまっていた。しかし、かき氷を作る時に、氷を給食室に取りに行くことを3、4歳児に頼むと、先頭に立って行き、「すみませーん、氷ください」とやり取りしていた。次には焼き鳥を食べること

を覚えていて、次の活動として発言し、楽しみにしていた(6月25日)。

9月に、園長に神輿の飾りの作り方を教えてもらう時は、「園長さん、これちょうだいって言おう」などと、積極的に話し合いに参加していた(実際に作るのは難しかった)。焼き鳥をどこで買えばよいかなどを、給食室に聞きに行く時も、先頭に立って行っていた。そのような会話ができる場があったことは、Y児にとって受けとめられ認められることにつながった。

自由遊びの中では7月頃から、玩具の独占欲が強くなったり、自分の思いが強く、それを通そうとさらに口調も強くなったりするので、相手とトラブルになってしまうことがあった。しかし、プロジェクト活動の中では、そのようなトラブルは見られなかった。同じ目標に向かって活動していることから、支え合いや協力が生まれていたからであろう。

10月には、5歳児がサメを作っているのを傍で見ていて、ほとんど完成すると「僕も作りたい〜」と言って4歳児同士で一緒につくることができ、「僕たちテープで貼った〜」と伝えていた。お手本があったり教えてくれる友達がいたりすると、それほど難しくない部分には参加できていた。自分たちで作った金魚を水の中に入れるのも5歳児がやるのを見て「○○○(4歳児グループ)さんもやりたい」と言ってやっていた。自分だけではなく「4歳児で作った金魚」という意識ができてきたのではないかと思われる。

10月の提灯づくりは5歳児に作ることを頼まれても「あーごめん。難しいと思う」と断り、保育者に「1回やってみよっ！」と言われても「うーん」と二の足を踏んでいた。保育者が本物の提灯を持ってきて、提灯がどうやってできているか問いかけると「紙がどうやってくっついているかは、取らないとわからない」と、一枚一枚、慎重に貼ってある紙をはがしていった。途中でどこかに行ってしまったので、やる気をなくしたのかと保育者が思っていたら、風船を持って来て、「これ提灯みたいじゃん」と言った。そして、提灯に紙が貼ってあったように、風船にも紙を貼ると言った。提灯を分解してしまいが、紙を貼ってできていることが心に残ったようで、風船への応用のアイデアが生まれた(10月26日)。その後風船への紙貼りは積極的に行っていた。紙を貼ったら、次に

は「赤と白で塗るんだよ。お祭りで見たもん！」と発言しており（11月1日）、見通しも持てるようになった。このような取り組みに参加する中で、友達とのトラブルでは、手が出ることは少なくなってきた。肢体不自由のある4歳児に優しく声をかけたり、鼻水を拭いてあげたりする姿も見られた。

11月には、自由遊びでは同じ4歳児の友達2人とブロックをつなげて電車を作っていることが多く、仲良く遊べることが増えてきた。トラブルになることもあり、保育者が間に入り話を聞くと、自分の言葉で状況を説明しようとするが、泣いてしまい吃音が多くみられた。しかし、泣き止んでから改めて話を聞くと、何が嫌だったのかを自分の言葉で話すことができた。

1月の櫓の柱の色塗りでも張り切ってやっており、「あと3本塗ればいいよ～」と他の友達にも伝えていた。1、2月には、自分だけでなく周りのこともよく見ていて、他の友達のトラブルの時には状況を保育者に説明することもできるようになった。Y児自身は相手がどうしたかったか相手の思いや状況に気づかないことがあり、トラブルになることもあった。しかし、言葉が豊かになってきたので、トラブルになっても手が出ることはなくなってきた。保育者が状況を伝えると納得し、相手の思いを受け入れることができるようになった。

以上のように、Y児はプロジェクト活動では、楽しそうに5歳児がやっていることを見て自分にもできそうだったことや、自分の役割がはっきりして得意なことであれば、積極的に参加していた。少し困難なことでも、他の子どもたちに教えてもらったり、じっくりと自分のペースで取り組むことができるようになったりし、自信ももてるようになったと思われる。また、だんだんプロジェクトの規模が広がって全体を見て分担したり協力したり、見通しをもって活動することが増えていくなかで、Y児も周りを見る力や仲間意識が育っていったのではないかと考えられる。

IV. まとめ

本実践では、最初は5歳児が中心であったが、次第に3、4歳児も見通しをもち、主体的に参加するようになり、

子どもたちによって、計画・実行されるようになっていった。ロジャー・ハートの「参画のはしご」¹¹⁾を参照すると、本実践では参画の6の段階「おとながしかけ、子どもと一緒に決定する参画」から7の段階「子どもが主体的に取りかかり、子どもが指揮する参画」、8の段階「子どもが主たち的に取りかかり、おとなと一緒に決定する参画」へと高まっているといえる。ハートは、子どもたちにもっとも身近なことから自分たちで決めさせるところによって、自分でも何かができるという感覚を育てていくことができると考えているが、そのような自信も子どもたちに育っていったといえる。また、子ども同士の助け合い、共感や教え合い、分担と協力なども自然にみられるようになっていった。

このように発展していくためには、保育者のいろいろな配慮や援助があったことは、すでに述べたとおりである。なかでも、毎回の活動の事前・事後の話し合いと教育的ドキュメンテーションによって、子どもたちの興味や要求を引き出し、目標を共有し、プロジェクト活動を発展させていっていることが特徴的である。スウェーデンのプロジェクト活動においては、「子どもたちとの議論や対話の中で保育チームがすべきことは、子どもが今ここで専念している活動の中から、議論可能で彼らを挑戦させることができる内容を見つけ出すことである。また、子どもたち自身に、自分たちが何に興味を持っているかを認識させることが大切である。この作業には、ドキュメンテーションが必要不可欠である。」¹²⁾と述べられている。本実践においては、そのようなドキュメンテーションを活用した話し合いが行われていた。

全体的には作る活動が中心であったが、ときどき関連したクッキングを入れることによって、楽しい活動で子どもたちの雰囲気が盛り上がり、同じ目標に向かって団結していっていることがわかる。日常的な活動とイベント的な活動との兼ね合いを考えることも重要である。

また、特にX児やY児のようなイメージを持ちにくく複雑な活動が苦手な、人間関係がつくりにくい子どもにとっては異年齢のよさもあり、5歳児が先行して行っている活動を見て、憧れて真似したくなり、意欲が湧き、教えてもらったりしながら、参加することができていた。他の遊びでは、玩具の取り合いなどのトラブルになることがあっても、プロジェクト活動では排除されることな

く、やりたいと言ったことは受け入れてもらえ、自分のペースで安心して参加でき、やったことをみんなに報告する場もあり、達成感や自信をもちやすい環境があったことが効果的に作用したと考えられる。本実践の多くの部分は、一斉に全員で活動するスタイルではなかったもので、X児やY児以外の子どもたちもそれぞれの興味に応じて、多様な参加の仕方をしていた。クラス集団の全ての子どもたちを把握し検討することはできなかったことは、今後の課題である。

本プロジェクトでは、作るものが多く、一つのことをじっくりと探究するまでには至らなかったが、子どもたちは実際に作ろうとするとわかっていないことに気づき、解決しようと意欲が高まり、いろいろなことを学んでいった。このような活動が一般的なのではなく、多様なタイプのプロジェクト活動がありうるので、今後はさらに異なるタイプのプロジェクト活動も分析していきたい。

付 記

本研究は科学研究費（2017～2020年度 基盤研究(c) 課題番号17K04634 山本理絵研究代表）の助成による。観察・聞き取り調査・分析を山本・國京で行い、資料の整理・作成を國京、本文の執筆を主に山本が担当した。研究に協力していただいた観察園の皆様に感謝します。

注

- 1) 山本理絵「異年齢保育が提起しているもの」芦澤清音他「障害と多文化を包摂するインクルーシブ保育の可能性(2)」(自

- 主シンポジウム)『日本保育学会大会論文集』2020
- 2) 芦澤報告 同上。詳しくは、芦澤清音『発達障がい児の保育とインクルージョン—個別支援から共に育つ保育へ—』大月書店 2011 参照。
- 3) 山本理絵・藤井貴子「人間関係に困難を抱える幼児の異年齢保育における支援(1)」『愛知県立大学教育福祉学部論集』第63号 2015 pp. 99-110 / 山本理絵・松川礼子「人間関係に困難を抱える幼児の異年齢保育における支援(2)」『愛知県立大学教育福祉学部論集』第64号 2016 pp. 111-120 / 山本理絵・松川礼子・近藤みえ子「人間関係に困難を抱える幼児の異年齢保育における支援(3)」『愛知県立大学教育福祉学部論集』第65号 2017年 pp. 63-78
- 4) 山本理絵・藤井貴子・近藤みえ子「人間関係に困難を抱える幼児の異年齢保育における支援(4)」『愛知県立大学教育福祉学部論集』第66号 2018年 pp. 97-107
- 5) 山本理絵「異年齢保育が提起しているもの」(前掲)
- 6) 山本理絵編著『子どもとつくる5歳児の保育』ひとなる書房 2016年 p. 62参照。
- 7) 同上書 pp. 66-68
- 8) アンナ・ギュンター・ハンセン「スウェーデンの教育的ドキュメンテーション」『愛知淑徳大学論集 福祉貢献学部篇』第9号 2019年 p. 54
- 9) C. エドワース / L. ガンディーニ / G. フォアマン編, 佐藤学・森真理・塚田美紀訳『子どもたちの100の言葉—レジョ・エミリアの幼児教育』世織書房, 2001年 p. 280
- 10) ウェンドラー由紀子「スウェーデンの保育—就学前学校における教育ドキュメンテーションとプロジェクト活動—」『生涯発達研究』8号 2016 pp. 61-62
- 11) ロジャー・ハート著, 木下勇・田中治彦・南博文監修『子どもの参画—コミュニティづくりと身近な環境ケアへの参画のための理論と実際』萌文社, 2000年 p. 30, pp. 41-46
- 12) 白石によれば, 教育的ドキュメンテーションについて, 学校発行の冊子 (Skolverket, 2012, 15-19) でこのように述べられている。白石叔江「スウェーデンの教育的ドキュメンテーションとは何か—学校発行の冊子と実践例を資料として—」『愛知淑徳大学論集 福祉貢献学部篇』第9号 2019年 p. 46